

日本作文の会編

日本の 子どもの詩

福井





日本作文の会編

日本の 子どもの詩

石川

岩崎書店

日本の子どもの詩 17 石川

一九八三年七月二五日 初版発行

編者 日本作文の会

発行者 大川松利

印刷所 株式会社 K・M・S

株式会社 金羊社

製本所 小高製本工業株式会社

発行所 岩崎書店

東京都文京区水道一―九一二
電話(〇三)八二二―九一三二(代)

はじめに

各都道府県別につくられた四十七冊のこの本ゼンたいには、一九一八年「赤い鳥」が創刊されてからあとの六〇年間につくられた、日本の子どもの詩のおもなものが、年代順にならべてあります。

これらの詩は、そのときどきによって、児童自由詩、童詩、児童詩、児童生活詩、生活童詩、生活綴方の詩などともよばれ、世界にもまれなものであります。

これらは、ねっしんな先生たちによる創造的な教育のいなみとしてうまれたものですが、日本の子ども自身がつくりだした芸術（現代の子どもの「わらべうた」）としても、大きな意味があります。

わたくしたちは、このことを頭において、念入りにこの本をつくりました。

この一冊は、そのうちの「石川編」であります。どうぞ、ひとつひとつといねいにお読みください。

もくじ



1918
～
1945

8

夕ぐれ
口笛

池

くだもの
ごうがい

9

村の秋

土

10

暗き影

大木

11

夕暮れ

遠くの畠

12

おせどのおいけ

ある日

初霜の朝

春がきた

テニス

13

かぜ

とろ火

14

川岸

窓かけ

足袋

わらきり

豆はこび

15

夕暮
べんきょう

夕日

16

かげろう

父

17

春

我が家

18

草もち

しずく

いなが焼き

洗濯

19

田切り

弟

20

寒い夜



1945
～
1959

22

けんか

みみず

33 たたきうり
 32 お父さん
 31 手
 30 すいか
 29 やぎ
 28 音の世界
 27 なわな
 26 ふろ
 25 おとうさん
 24 えんびつ
 23 おとうさん
 黒い木
 ふとん
 へび
 火
 かま洗い
 とうちゃん
 の死
 南西諸島
 先生
 かあてん
 やぎ
 なみ
 川
 ていてつぼう
 おじさんの写真
 田うえ
 夕日とオートバイ
 たたきうり

44 新しいわな
 43 かべつけ
 42 ごはん
 41 日よう日
 40 稲かけ
 39 いねこき
 38 えんびつ
 37 炭かずき
 36 いねはこび
 35 学校の火じ
 34 かまどうま
 33 虫
 32 お父さん
 31 子もり
 30 かあちゃんのちち
 29 口笛
 28 とりいれ
 27 いねこき
 26 おしめっこ
 25 稲かけ
 24 線路工夫
 23 日よう日
 22 ごはん
 21 としひろくん
 20 とうばん
 19 かべつけ
 18 よる
 17 火の用心
 16 新しいわな

56	55	54	53	52	51	50		48	47	46	45										
大雨	つばめの子	なみ	えにつき	窓の外	蛙	どれい	チン坊	汽車	トラック	えらいもん	あたらしい本	もぐらとり	ハーモニカ	かあちゃんのはら	かあちゃん		夕食時	屋根	流感	茶わん	牛
																					
																1960					
																~					
																1969					

69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57												
せんそう	テレビ	ちきゅう	うすすり	セーター	稲穂	いねこき	かあちゃん	清水のぼる	めんよう	うで立て後てん	きんかとう	かんじのけいこ	あけび	つうちほ	おちばのこうさく	おばあさんのかお	川	おばばの手	いなずま	ほうしゃのう	かぶとむし	水泳	すもう	おかあさん

82 うそ

70 元旦

83 どうなるたばこ

71 大根あら

84 朝

「毛ぶかい」ということは

72 牛の鼻かんとおし

73 雲を見ていると

74 いろいろ

75 うらめしい雨

汽車の灯

冬の日の午後



1970
～

78 はじめてのきゆうしよく

もうすぐなつやすみ

へそのお

79 かえるのなきごえ

しゆくだい

80 でんわ

光真君

兄弟げんか

81 あじさい

ズボンがやぶれた

82 うそ

83 どうなるたばこ

84 朝

カエル

ねんね

85 おなかほんほん

あさひ

86 せんせいおしえて

めいれい

87 ニセアカシア

弟

海はガラスの中にある

88 テレビにうつって

ねこばば

89 文集

うですもう

90 ふろちゃん

91 さんぱつ

ランナー

92 かまきり

おばあちゃんのおっぱい

ふろ

93 すてちやだめ

馬拉ソ

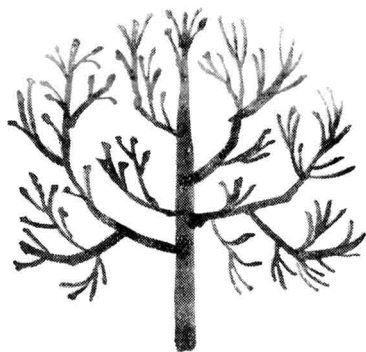
94 おとうさんは高い

101	100	99	98	97	96	95
まどの雪	じしゃく はるになったら	けっこんしき ゆうじ	いね上げ かきの木	つぎ 勉強	出稼ぎ 母ちゃん	うさぎ しも柱 東京のあんちゃん

110	107	106	105	104	103	102
この本の編集をした人たち	あとがき——石川県の児童詩指導の歩み	母 合理化	かたもみ ふろたき	もちつき ありがとう	いか おかあさん	おとうさんの手 お父さんのにおい おかあさん、ごめんね

*





1918～1945

(大正7年)

(昭和20年)

わが国で子どもに詩を書かせる運動が北原白秋の提唱ではじまった。石川県の子どもも

詩を書きはじめた。

昭和十年ころ

「子どもに詩を書かせることが大事だ」ということが石川県の学校に大きくひろがり、たくさんの方々が詩が生まれた。

ここには、このような戦前の詩がならんでいる。

タぐれ

平谷平蔵 小6

くらい糸で

しばられるような

気がする、

くもったタぐれ。

鳳至郡大屋校

口笛

大角幸三 小6

雲が動いた、

お日様が光った、

そこで口笛ふいた。

鳳至郡大屋校

池

山下信一 小6

魚さかなのように

池の上を

風がおよぐ。

鳳至郡大屋校

くだもの

戸田 静 小4

もうあんずも紅あかくなる。

うめも大分大きくなる。

私も大分大きくなる。

みんなも大分大きくなる。

石川県立師範附属校

ごうがい

泉屋一江 小3

ひらひらと

ごうがいまいた。

みんなが

わっと

おっかけた。

あとにでた子はいかいそうに

じどうしゃのゆくのを

みていた。

石川県立師範附属校

村の秋

神保直材 小3

だんだん田んぼが
きいろくなった。
秋の村はいそがしい。
いねかりも
ちかづいた。
木の葉もだんだん
きいろくなった。
山もどこも
きいろくなった。
秋の村は
きれいだな。
元いた村を思い出す。
森も田んぼも光って見える。
やねのかわらも光ってる。

石川県立師範附属校

9

土

道下喜利 高2

日に日に南風が吹いて
若葉は初夏の姿になった。
太陽の光も初夏らしく
緑の若葉にふりそそいでいる。
淡茶色うすちやいろのふかふかの土は
ふつくりとふくらんで
その土から
かげろろが空にのぼって行く。
次から次へと土がふくらんで
次から次へと新芽が出る。
蛙かえるも蛇へびも虫も、土から出る。
静かに
初夏は土おとすに訪れる。

石川県立師範附属校



暗き影

新井修吉 高2

柱にもたれて行末を思った時

自分の影は暗かった

ほっと

吐息も重き寂しき私

日は古びた畳の上に

うすらうすらとさしていた

だが

蟬の声一つすら聞こえない

もう秋か

こう思った時 私の影は

より以上暗くなっていた

悲哀の吐息は

朝あけの部屋に寂しくつづく

石川県立男子師範附風校

大木

新井修吉 高2

境内のつき山に

幾本もの大木が茂っている

その根は多くの蛇のように

地上にあらわれて

いかにも老いさらばいたように見えるが

この幹はどうだ

この幹は

一面に、もの生えた皮につつまれた

太いこの幹は

まだまだ倒れはしないぞ

この根は蛇のように

幾すじも地上にはい出しているが

まだまだ数かぎりない根が

地中深く

四方八方にはびこっていることを

君は知らないのか

ああ

生の力の如何に偉大なることよ

石川県立男子師範附屬校

夕暮れ

橋本龍太 高2

もうすぐ夏だよ
と

夕日に

赤く染^{そま}っている紅葉の葉が

小さくゆれて

ささやいている

多くの群から離^{はな}れて

三羽の鳥が

静かに夜を待っている

村の上を

夕映^{ゆづえ}をあびながら

山の方へ飛び去った

石川県立東校



遠くの島

浅野武文 小3

いねかりあとだ

わら家できた

お宮が見える

お宮のお屋根

お日様の光

お屋根が赤い

島のえんとつ

けむりがもこもこ

赤色えんとつ

きれいなえんとつ

遠い島はきれいな島

石川県立師範附屬校

おせどのおいけ

中田久子 小3

うちのおせどに

大きな大きな池がある。

なつがくると、

にいさんに

たらいにのせてもらうのだ。

羽咋郡甘田校

ある日

村田忠勝 小5

おせども、おせども、

車は動かず。

坂に日が照る。

河北郡別所校

初霜の朝

川口佐安 高3

初霜が解けて日の高い田の畔に

家の猫が一ぴきのむぐらを捕えて

投げだしてはくわえていた。

私は思わず微笑んだ。

それは或るうすら寒い晩秋の朝の

楽しい小鳥取りの

帰り路でありました。

鳳至郡穴水校

春がきた

石川はる 小3

春がきたぞ。

木もいきいきしたぞ。

お日さまぴかぴかひかる。

子ども

げんきよくあそんでる。

羽咋郡下甘田校

テニス

森腰 實 小5

綴方の時間に

テニスをちよつと見て

先生に見られて

しかられた。

ほんとうに

ゆだんは

できないな。

鳳至郡南北校

かぜ

ふうふう、

かぜがふく。

うちのガラスは

われている。

河北郡高松校

とろ火

谷口直吉 高2

急にもえて消える火がある。
沸きたった湯もすぐさめる。

鳳至郡上町校

川岸

油木甚松 高2

春とは思えない

むし暑い夕方、

弟をおんぶして、

静かな渚の淵で、

畠へ行っておられる母を待つ。

だまって下を見たら、

泡を立てて暖かそうな水面に、

いやそうながしがみ面をした私の顔と

淡い桜色をした夕日を浴びて、

大空をゆっくりと歩んで通る。

雲のかたまりが一つ。

一つ一つの泡に

同じくうつる。

河北郡大根布校(指導)前川長作



窓かけ

奥野すずえ 小6

白い光が

教室いっぱいです。

新しい窓かけ。

私の心も

すきとおるようです。

河北郡川尻校(指導)寺西正雄

足袋^{たび}

出山安成 高1

いろりの口に乾してある父の足袋

黒くよごれている。

親指のきびすのところが、

小さく破れて白く中が見える。

もう冬がくるのだ。

河北郡大根布校(指導)前川長作

14

わらきり

新納外治 小5

おそくまであそんでいて家にかえた。

月夜だ。

牛はかいばをばくばくくっている。

わらきりはじめた。

月夜であかるい。

柿の木のかげ、くらのうしろまでうつる。

一そくはやいた。^(きざんだ)

もう一そくはやいた。

牛のかいばくくっているのをきりきり見た。

石川郡押野校(指導)岩田一久

豆はこび

西尾啓二 小5

リヤカーにつんで、

家へどんどんはこぶ豆がら。

豆がらがわにすれて、ばちばちなる。